

# ロバート・フロストの「山」について

## — 山に登ることについて語ることの意味 —

寺尾 勝行

特別な理由があった訳ではない。いかにも岩波文庫らしいマイナーな響きを持つ書名にひかれて買って置いた『ペトラルカ ルネサンス書簡集』の、しかしこれは個人的な興味から最初に目を通したのは「ヴァントゥウ登攀記」の章であった。一読して妙に気にかかったのは、フロストによる以前からのお気に入りの詩「山」(“The Mountain”)との類似である。

直接的な影響関係ではないだろうとの印象は当初からあったが、しかし偶然の一致として片付けるには余りに多くの類似が見つかる。しかも注意して読み返せば、その度に興味深い箇所が出てくる。直接的な影響関係ではない何かがそこにはあるはずで、それは何なのか考えてみようというのが本稿の目的である。

### I. ペトラルカのいわゆる「ヴァントゥウ登攀記」をめぐる

1. ルネッサンス期イタリアの学者にして詩人であり、最初期の人文主義者とされるペトラルカ(1304-1374)による、いわゆる「ヴァントゥウ登攀記」は、『親近書簡集』(原題 *Rerum Familiarium Liber*, 1350年頃には編纂に着手)の第4巻に収録された書簡で「彼のラテン語で書かれた散文作品の中で、今日まで最も多く論じられてきたもののひとつ」(佐藤, 93)<sup>1)</sup>とされる。但し「ヴァントゥウ登攀記」という名称はあくまで後世の人々が慣習的に呼び習わしてきたものであって、オリジナルに付されたタイトルは岩波文庫版によれば「自己の悩みについて 聖アウグスティノ会士にして神学教授なるディオニジ・ダ・ボルゴ=サン=セポルクロに」であると考えられる。
2. 後の議論に関連して留意してもらいたい箇所の指摘、引用を行いながら、以下おおよそのあらすじを紹介しておく。

リウイウスのローマ史を読み返してマケドニア王フィリッポスがハイモス山の頂からアドリア海と黒海が見えるという噂を信じその山に登ったという記述に出

会ったこと、またその後の様々な著述家がその噂の真偽に言及していることを知ったこと、を契機に「ただ、有名な高山の頂を見てみたいという願望にかられて」(ペトラルカ、62)<sup>2)</sup>、ヴァントゥウ山に今日登ってきた、という事実の報告からペトラルカは「書簡」を始める。

但し、登山の記録、途中の様子描写が始まるのはまだ先で、事前の準備等が語られる。事前の準備とは例えば、同伴者の選択に苦勞し、最終的に弟のゲラルドを選んだこと、また前日麓まで行き、一泊した上翌日登山を行ったことなどである：

「私たちは所定の日にわが家を発ち、夕がたマロセヌに着きました。そこは山の北側の麓にあります。私たちはそこで一日をすごし、ついにきょう、めいめいひとりずつ召使いをつれて山に登りました……」(ペトラルカ、64)

登山を開始して最初のエピソードは、「山の谷あい」で「年寄りの羊飼い」に出会ったことである。「かれは口を酸っぱくして私たちの登山を思いとどまらせようと」(ペトラルカ、65)する。「かれもまた五十年前、おなじ青春の情熱にかられて頂上まで登った」が「そこから持ち帰ったものはいえただ、後悔と疲労困憊、岩かどやいばらでずたずたになった体と衣服だけだった」というのだ。

また、ペトラルカと弟ゲラルドの登り方の違いについても言及がある。「弟のほうは近道をして尾根づたいに、ずんずん高いところをめざして登っていきますが、私は懶惰にも低いところへとおりて」行く。「あちら側にもっと容易な登り口が見つかりそうだし、遠回りになってもいいからもっと楽に進みたい」(ペトラルカ、66)という理屈からである。しかし「そのうちに、こんなとりとめもない彷徨に疲れはて、うんざりして後悔し、まっすぐに高みをめざそうと決心」する。にもかかわらず「その峰をあとにするやいなや……さきほどの回り道のことは忘れてしまって、またもや低いところへと駆りたてられて」ゆく。結局ペトラルカはこんなことを「短時間に三度もそれ以上も」(ペトラルカ、67)繰り返すことになる。

易きを求め遠回りをしては反省し、再び頂上を目指すことを繰り返した後、とにかくペトラルカはヴァントゥウ山の頂上にたどり着く。その直後こそ「ただならぬさわやかな大気、ひろびろと打ちひらけた眺望に感動し……茫然と立ちつくし」(ペトラルカ、71) たものの、ほどなく「新しい内省が私のこころを領し」、ペトラルカはこれまでの十年間を反省するように振り返る。そのうちに、アウグスティヌスの『告白』を読みたくなり、常に持ち歩いていた小型版の『告白』を任意に開いてみる。

そこで彼の目に飛び込んできたのは「人びとは外に出て、山の高い頂、海の巨大

な波浪、河川の広大な流れ、広漠たる海原、星辰の運行などに讃嘆し、自己自身のことはなおざりにしている」(ペトラルカ、75)という文章である。ペトラルカは「愕然とし」、結果「山を見ることには飽きてしまって、内なる眼を私自身へとふりむけ」(ペトラルカ、75)、それ以降麓に帰りつくまでひと言も発することなく「沈黙の内省にふけた」(ペトラルカ、75)。

その後夜もふけてから宿に帰り着いたにも関わらず、内省の興奮がさめやらぬ内に、また内省の結果としての決意が変わらぬ内に、手紙の形にしたためたことが直接の受取手とされるディオニジに対して付記される形でこの「書簡」は閉じられる。

3. 次に文学作品としての「ヴァントゥウ登攀記」の特徴についていくつか指摘を行っておく。一言で言ってしまうえば、この作品は念入りに構成された文学テキストであるということを押さえておく必要がある。

a. まずこの作品には古典(先行作品)からの引用が多い。

直接的なものだけでリウィウス Livius の『ローマ史』 *Ab urbe condita libri* 第40巻第21章(ペトラルカ、63)、ポンポニウス・メラ(名のみの言及、『世界地理』の著者か)、ウェルギリウスの『農事詩集』第1巻145(ペトラルカ、65)、オウィディウスの『黒海便り』第3巻1・35(ペトラルカ、68)、アウグスティヌスの『告白』第2巻第1章(ペトラルカ、72)、オウィディウスの『恋の歌』第3巻11・35(ペトラルカ、72)、アウグスティヌスの『告白』第10巻第8章(ペトラルカ、75)、第8巻第12章(ペトラルカ、76)、『ローマ書』13(ペトラルカ、76)、『マタイ伝』19(ペトラルカ、76)、ウェルギリウスの『農事詩集』第2巻490-92(ペトラルカ、78)がある。

さらに佐藤三夫氏によれば、「……この分析においても、アウグスティヌスがペトラルカの唯一の著者であるわけではない。セネカやウェルギリウス、またオウィディウスやホラティウス、そしてラテン抒情詩の全伝統が陰に陽に引用されている。」(佐藤、113)ののだと言う。

- b. また、弟ゲラルドの同伴は実際に一緒に登ったからというだけではなく、明かな文学的意図を持って描き込まれている。共に登る者として誰が最も望ましいかという同伴者の選択の段階から説き起こし(先のあらすじ紹介第3段落を確認のこと)、兄弟間の登り方の違いを描き、さらにはペトラルカが内省に入って無口になってしまった理由がゲラルドにはどうしても理解できなかったことを指摘・確認する等である。これも一言で言ってしまうえば、弟は兄ペトラルカ(つまり作

者自身)との対比を狙って書き込まれている、ということである。言い方を変えれば、登山の際の易きに流れ遠回りをする描写は比喩的な意味をも担わされている、ということである。うっかり読んでいたら気付かないかも知れないが、この時ヴァントゥウ山に登ったのは兄弟およびそれぞれに従者が一人、の計4人であったはずだが、従者たちへの言及は一度しかない。描写は意図的に絞り込まれて行われているのである。

c. 加えてこの書簡は、夜も更けて帰り着いたその夜に書かれたと断られているにもかかわらず、後の研究により50代になって過去を思い起こしながら書き直されたものであるとほぼ結論づけられていることも指摘しておきたい。これは『親近書簡集』全体の性格付けからも妥当な考えであるように思われる。即ち、この書簡集には現実の知人のみならず、ペトラルカが尊敬する過去の人物に宛てて書かれたもの、さらには未来の人物に宛てて書かれたものさえ存在する。ペトラルカにとってはそもそも書簡という形式が、内省のための重要な形式であったということである。

4. 以上2、3を受けて、ここで「ヴァントゥウ登攀記」は「登攀記」なのか、内省録なのかを問うておきたい。

「ヴァントゥウ登攀記」は西洋文化の中で、初めて純粹に山に登ることのみを目的として行われた登山の記録であるとされることが多いが、そのような性格付けはこのテキストの最も適切な性格付けなのかどうか。

ペトラルカがヴァントゥウ山に登ろうと考えた動機の中に、ただ純粹に登ってみたかったからという関心が含まれていた可能性を否定するつもりはない。しかし、少なくとも出来上がった「ヴァントゥウ登攀記」と一般に呼び習わされている書簡(体の文学テキスト)から伺われる動機は、登攀記というよりもむしろ内省録と呼ぶべきものであろう。

そして本稿としては、この文学テキストから読み解くことができる、ペトラルカにおける内省と自然の関係について、『ペトラルカ ルネサンス書簡集』の「ヴァントゥウ登攀記」への近藤恒一氏によるイントロダクションの次の記述に注目しておきたい。

自然へとひらかれたこの美的感性や知的関心は、しかしペトラルカにおいては、自己の内面へと見開かれたまなざしと別物ではない。だからこそ、最初の近代的登山の記録であるこの登攀記は、じつはまた内省や自己分析の記録でもあったのであ

る。事実、そこでは、自然へのまなざしと内面へのそれとが交錯し、刺激しあい、あるいは両者が結びつく。あえて一般化して言えば、自然の再発見と、人間としての自己の再発見とは、根底においては一つに結びついていたのである。(ペトラルカ、59)

西欧においてはペトラルカの段階で既に自己の発見、人間という存在についての省察のために自然に視線を向けるという志向があったと言えるだろう。

## II. ロバート・フロストの詩「山」(“The Mountain”)について

最初にこの詩の全体的な展開を確認しておこう。

詩には話者「私」がいて、「私」の視点を基本に過去の出来事が語られる。詩の冒頭1.1. から1.18. までは、「私」がある時とある田舎町に所用で(?) 出かけ、一泊し、翌朝早く散歩に出かけたところ、地元の農夫らしき老人に出会うまでが、小説でいうところのいわゆる「地の文」の形で語られる。

1.19からは、ほぼ「私」と老人の会話(対話)という形をとって、交互に台詞が交わされる。

最終3行半は再び地の文に戻って、「私」を煙に巻くように、しかし飄々と老人が立ち去る姿が描かれる。

中間部分にあたる、話者「私」と老人の対話部分は、英詩の、さらには西洋文学の伝統的なジャンルである牧歌(Pastoral)を強く想起させる表現形式となっていることを確認しておきたい。その際に、牧歌の定義について深入りすることは避け、大方の共通認識として了解が得られそうなところ、具体的には、自然豊かな田舎を舞台に、(多くは)羊飼(あるいは羊飼いに身をやつした人物)たちが、それぞれの異なる立場や価値観から、詩の形を用いて議論を戦わせる。議論の話題は多くはそれぞれの労働であったり、恋の悩み、また、時として音楽、詩についてである<sup>4)</sup>、程度にとどめておきたい。この中で、特に立場や価値観の異なる者同士が議論を戦わせるという部分に注目しておいてもらいたい。

フロストの詩全般(牧歌の形が意識されたものだけでなく、抒情詩についても)で、対照的な価値観が提示され、その葛藤の止揚として帰結部分が示されるというパターンがよく見られる。夫と妻、男と女、自然と人間、個人と社会(共同体)等々、という具合に実例については枚挙に暇ない。

この詩においても、対照的な描写、設定はあちこちに見て取ることができる。夜と昼、荒々しい自然と穏やかで美しい自然、人間と自然、等々。しかしこの詩において

最も対照的に描き出されていくのは、対話をする二人の人物——話者である「私」と老人である。

以下、対照的な描写を冒頭から簡単に確認しながら読み進めてみよう。

The mountain held the town as in a shadow.

I saw so much before I slept there once:

I noticed that I missed stars in the west,

Where its black body cut into the sky.

Near me it seemed: I felt it like a wall 5

Behind which I was sheltered from a wind.

And yet between the town and it I found,

When I walked forth at dawn to see new things,

Were fields, a river, and beyond, more fields.

The river at the time was fallen away, 10

And made a widespread brawl on cobble-stones;

But the signs showed what it had done in spring:

Good grassland gullied out, and in the grass

Ridges of sand, and driftwood stripped of bark.

I crossed the river and swung round the mountain. 15

And there I met a man who moved so slow

With white-faced oxen, in a heavy cart,

It seemed no harm to stop him altogether.

“What town is this?” I asked. (II.1.-19.)<sup>3)</sup>

何かの用事があってこの町を訪れた「私」はおそらく日も暮れてから宿に到着したのであろう、件の山と町の位置関係をはっきりと確かめることができないまま、宿から西の方向の星が見えないことを、山がすぐ近くにあるためだろうと考え、そのまま眠りに就く。(II.1-6) この時山はこの町を「陰の中に抱きかかえ」(1.1.) ているように見え、「風から守ってくれる壁のような」(II.5-6) 「身近な」(1.5. “Near me it seemed”) 存在と感じられたという。

にもかかわらず (1.7. “And yet”)、翌朝目覚めて散歩に出てみると、山までにはかなりの距離があり、想像していたよりもはるかに大きな山であったことが判明する。散歩の足をさらに伸ばすと、丸石の上を大きな音を立てながら広々と川が流れている。今この季節でこそ水量が減っているが、後に残されている痕跡から、春にはどれ

ほど激しい水流があったかまざまと想像される。立派な草地にはえぐられた跡が、草の上には砂が尾根の形状に幾筋も残り、皮を剥ぎ取られた流木もある。(II.12-14) 川の潜め持つ暴力性は、その川の源である山が潜在的に持っている暴力的性格をも示唆しているだろう。

先にこの詩において最も対照的に描き出されていくのは、対話をする二人の人物——話者である「私」と老人であると書いたが、実際には二人の対話が始まる前の、地の文による前振りの段階 (II.1-14.) で既にいくつかの対照性が提示されていたのであった。しかもその対照性とは、例の山の解釈（「大きな山なのか、そこそこの山なのか？宿の近くにあるのか、離れているのか？宿に泊まっている自分にとって親しみを感じさせる山なのか、危険性あるいは敵意を持った存在なのか？」）を巡ってのものである。さらにはこの対照を生み出すのが、話者「私」の想像であることを押さえておきたい。山そのものは暗闇の中であってよく見えないが、山があるらしい方向の星がそっくり見えないことから話者はすぐ近くに山があるのだらうと推測する。散歩の途中で横切ることになった河原は、瀬音こそ大きいものの危険を感じさせるほどではない。しかし河原に残されたいくつもの痕跡から想像するに、増水期にはこの川はかなり危険であることが推測される、という具合に。

現実には五感により体験する山（自然）と、頭の中で想像する山（自然）との対照性は念入りに強調されている。1.7. “And yet”、1.12. “But” に注目してもらいたい。

このように詩の基本的枠組みや展開の予告がなされた後、話者と老人の対話が始まる。

件の山がある場所の名を聞かれ、さらにどこから来たのかを尋ねられた老人は、村らしい村などなく山のふもとに農場が散在するにすぎないこと、それは「あやつ奴が（リュネンバーグの）場所のほぼ全てを占めている」ためであることを指摘し、牛の突き棒で例の山を指し示す。「指し示されたその先には、山がどっしりと立っていた。」(1.28.)

突き棒の動きにつられて視線を向けた話者はさらに、目に入ってきた景色を描写する。牧草地が山腹を少しばかり駆け上がり、幹を見せる木々の壁があり、次に木々のてっぺんのみが見える部分があって、木の葉越しの見え隠れに崖が見える。水の流れていない溪谷が枝々の下から現れ出て、牧草地へと流れ込む。(II.29-34.) 描写の順番は非常にリアリスティックで、ふもとから次第に上へのぼって行き、一旦崖まで届くと再度牧草地へと下りてくる話者の視線の動きをまざまざと読者に実感させる。

牧草地に再度戻った話者の視線はしかし目ざとく登山口らしき小径を見つけたようで、彼は “That looks like a path./ Is that the way to reach the top from here?--” 「あれは

道のように見えますね。あの道を通ればここから頂上に着けますか？」(II.34-5)と老人に尋ねる。それに対し老人は“I don’t advise your trying from this side. / There is no proper path, but those that have/ Been up, I understand, have climbed from Ladd’s.”「あんた、こっち側からためすのはすすめられんな。／ちゃんとした登山道はないのじゃが、かつて登ったやつらは／わしの理解する限り、ラッド農場から登ったぞ。」(II.38-40)と答える。但し、話者が“You’ve never climbed it?”(I.44)と聞いたのに対し、老人が“I’ve been on the sides,/ Deer-hunting and trout-fishing.”「鹿狩りや鱒釣りのために山腹までなら行ったことがある」と答えた後、“There’s a brook/ That starts up on it somewhere-I’ve heard say/ Right on the top, tip-top--a curious thing.”「山のどこかから流れ始める小川がある——という話を聞いたことがある／まさに頂上、てっぺんのでっぺんから始まっていると言う——不思議な話じゃのう。」(II.44-7)と聞かれてもいない小川の話を持ち出したあたりから次第に会話は妙な方向に流れ始める。

老人の紹介する小川は、何とも謎めいていて(それでいて非常にリアリスティックであることも押さえておきたい)、かつ魅力的である。加えて彼の語り方は、意図的に話者の「私」の想像力をかき立てるような口調である。例えば54行目、“You know the kind. Then let the sun shine on it!”「あんたもこういったのは知っておるじゃろう。そこにお日さまでも当たって見なされ！」といった具合。

話者も乗せられて、おそらくは目の前の山を見やりながら、想像を逞しくする。

“There ought to be a view around the world 55  
From such a mountain--if it isn’t wooded  
Clear to the top.”... (II.55-7)

「そんな山からは世界中が見渡せるに違いありませんね  
——頂上まで木におおわれていなければ  
ですが。」……

さらには話者は、自分が登っている様子を、これもまた非常に具体的、かつリアリスティックに想像し始める。

... I saw through leafy screens  
Great granite terraces in sun and shadow,  
Shelves one could rest a knee on getting up--  
With depths behind him sheer a hundred feet-- 60



Or turn and sit on and look out and down,  
With little ferns in crevices at his elbow.

(ll. 57-62)

……木の葉のスクリーン越しに私の目に入ってきたのは、  
日の当たる部分もあれば、陰の部分もある、大きな大理石のテラスたち、  
登って行く時膝を休ませられそうな複数の岩棚——  
背後には丸々 100フィートもの深淵があるが——  
向きを変え腰掛けて、空側を見渡し、下を見下ろすこともでき、  
肘のところの岩の割れ目には小さな羊歯が生えている。

しかし想像をけしかけた当の老人は、相手の想像などお構いなしに、ll. 55-7の「私」  
のつぶやきに対してこう答える。

“As to that I can’t say. But there’s the spring,  
Right on the summit, almost like a fountain.  
That ought to be worth seeing.”

(ll. 63-65)

「それについてはわたしは分らん。じゃが泉はある、  
まさに頂上に、ほとんど噴水のようなのが。  
それこそ一見の価値ありというべきじゃ。」

念のため話者が「あなたは実際に見たことはないんですか？」（“You never saw it?”）と聞くと、返ってきた答えは、「泉がそこにあることについては全く疑いはないのじゃないか。（傍点は筆者による）わたしは見たことはないがな。」（“I guess there’s no doubt/ About its being there. I never saw it.”）というもの。話者と老人の会話はつながっているようで、随分とちぐはぐなところがある。

次のやりとりはその典型例である。

One time I asked a fellow climbing it  
To look and tell me later how it was.”  
“What did he say?”

“He said there was a lake  
Somewhere in Ireland on a mountain top.”

75

(ll. 73-6)

ある時わしは山に登っているやつに、

その（＝山の頂上にあるという泉の）様子を確かめ、教えてくれと頼んだことがある。

「彼は何と言っていました？」

「そいつの言うには

アイルランドのどこかでは、山の頂上に湖があるそうなの。」

目の前の山の頂上に泉があるかどうかという話が、アイルランドのどこかでは頂上に湖がある山があるという話を聞いたことがあるという話にすり替わっているのだ。

二人の会話がちぐはぐなのは理由がある。この二人は、こと山（の頂上）に登るということについて、対照的な考えの持ち主なのである。詩の始めから振り返って見ると、話者は一貫して頂上に登ることを重要と考え、いかにして登るか、登るための道はあるかどうか、登った後、頂上からの眺めはどのようなものが期待できるのかばかりを考え、またそれらの情報を得るために老人に質問をする。一方で老人は、それらの質問に答えているようで実際にはまもとに答えておらず、登るまでの途中にどのような見るに値するものがあるのかを語っていく。老人に言わせれば、ほぼ一生をこの山のふもとで暮らしてきたにもかかわらず（というか、それだからこそ）自分自身頂上に登ったことは一度もないし、また登りたいとも思わないのである：

It doesn't seem so much to climb a mountain

You've worked around the foot of all your life.

(II.83-5)

それは一言で言えば、“‘‘Twouldn't seem real to climb for climbing it.”「登るために登るというのは現実的とは思われない。」(I.88.) からだというのだ。ここで敢えてそれぞれの立場を簡単に分類するとしたら、話者はロマン主義的、老人は現実主義的とも呼べるだろうか。

では、老人は現実主義的登山観を話者に押しつけようとしているのであろうか。また話者は自らのロマン主義的登山観を老人に唯一の登山観として強制しようとしているのであろうか。さらに、何よりも、詩人自身は、話者と老人のいずれか一方の登山観を読者に「正統的なもの」として同意させようとしているのであろうか。言い換えると、この詩のテーマあるいはこの詩のメッセージは何なのだろうか。

それを考える上で参考になるのが、II.100-104. であろう。

「登りたいと思わなければ、登ったりはしませんよ……／登るために登るんじゃありません。」(II.89.-90.)

と言い、頂上に立つことにしか関心がない訳ではないことを示すためか、“Can one walk around it? Would it be too far?” (1.92.) 「歩いて山を一周することができますか？ 遠すぎますかね？」とまで老人に譲歩を見せた後、再度頂上近くにあるという泉のことを “Warm in December, cold in June, you say?” (1.100.) (「12月には温かく、6月には冷たい、ですか？」) と話者が聞いた時、老人は次のように答える。

“I don’t suppose the water’s changed at all.

You and I know enough to know it’s warm

Compared with cold, and cold compared with warm.

But all the fun’s in how you say a thing.”

(ll. 101-104)

「水が変わったのだとは全然思わん。／あんたもわしも人並みの知恵はある／寒いのと比べれば温かいのだし、暖かいのと比べれば冷たいというのは分かっている。／じゃが、楽しみはどんな風に言うかということにあるのじゃ。」

一見現実主義的に見えた老人であるが、彼は山に登ること、山の頂上に立つことを、生活していく上で直接的な役に立たないこととして否定している訳ではなかった。少なくとも、それを否定することによって自らの現実主義的な山の利用法を唯一のあり方として話者に押しつけようとするのが老人の目的ではなかった。

一方で山頂に立つことに必ず意識が戻ってしまう話者は、老人の見解を否定しようとしている訳ではない。むしろ老人の誘いに乗るかのように想像をたくましくして、実際に立ったことのない場所に立ち、周囲を見回す自分を描き出すのである。

二人が行っているのは、言葉のやりとり、大げさに言えば応酬を通して、想像力の羽を広げることであった。我々読者はこの時、詩の中で幾度か言及された泉を思い出してもよい。この泉が伝統的にヘリコン山にあるとされる、詩的靈感の源であるヒッポクレネの泉を思い出させることに照らし合わせても、この詩が実は詩的想像力の称揚についての詩であると言うことが可能であろうと思う。

但し詩 “The Mountain” が、単純に詩的想像力の称揚を行っているという訳ではない。フロストの詩の書き方はもう少し凝っている。それを詩のエンディング部分によりつつ説明したいと思う。

詩の最終5行は次のようになっている。

“You’ve lived here all your life?”

“Ever since Hor

105

Was no bigger than a——” What, I did not hear.  
 He drew the oxen toward him with light touches  
 Of his slim goad on nose and offside flank,  
 Gave them their marching orders and was moving.

「生まれてからずっとこの土地で暮らしてきたんですか？」  
 「暮らし始めた頃はホーもまだほんの……」何と言ったのか、聞こえなかった。  
 ほっそりとした突き棒で牛の鼻と右の脇腹に  
 軽く触れて牛を自分の方に引き寄せると、  
 彼は牛たちに進むよう命令を出し、動き始めていた。

改めて確認する必要はあるまいと思うが、ll.105.-6. ““Ever since Hor/ Was no bigger than a——”” は直訳すれば「ホーがほんの……ぐらいの大きさに過ぎなかった頃からずっと（この土地に暮らしている）」とでもなり、「……」の部分は老人が話者の「私」との会話もそこそこに立ち去り始めたので、「私」にははっきりと聞こえなかったという繋がりになる。但し、日本語と英語とで語順が異なるため、直訳すると「……」の意味が分からなくなるため上記のように訳しておいた。

件の山がまだ○○並に小さかった頃と言われて、○○の部分が聞き取れなかったら人はどう反応するだろうか。この一文は先ず単純に○○の部分には一体どんな言葉が入ったのだろうと話相手の（そしてここではまたこの詩の読者の）想像力を刺激する働きがある。それでいて山がたかだか数十年の内に人間並みに成長することをほのめかすような「言い方」（“how you say a thing”）は、老人の話全体に対して胡散臭さを覚えさせることにもなる。

やや突飛な比較であることを承知の上で喩えると、この詩のエンディング部分の効果は、マーク・トゥエインを一躍有名作家に押し上げた世評の高い短編小説、“Jim Smiley and His Jumping Frog”（「ジム・スマイリーと彼の飛び蛙」）<sup>5)</sup>のエンディング部分が挙げる効果とよく似ていると考える。

トゥエインの短篇において、語り手の「私」は東部のとある友人からレオニダス・W・スマイリー牧師の近況を確かめて欲しいとの依頼を受け、西部の廢鉱にサイモン・ホイラーという老人を訪ねるが、ホイラーから全く関係のないジム・スマイリーという無類の賭け好きの話を延々と聞かされる羽目となり、ホイラーが少しだけ中座をしたのを好機に逃げだそうとしたところに丁度彼が戻ってきて、ジム・スマイリーが飼っていた何とも奇妙な（胡散臭い）牛の話始める。:

“Well, thish-yer Smiley had a yaller one-eyed cow that didn’t have no tail only just a short stump like a bannanner, and--”

“O, curse Simly and his afflicted cow!” I muttered, good-naturedly, and bidding the old gentleman good-day, I departed. (以下2行略)

胡散くさいが、それだけに一層読者の好奇心（あるいは想像力）をかき立てずにはおかない存在（牛と山）についての話が、語り手によって中断されるのか、その話をしている人物のせいで中断されるのかの違いこそあれ、いずれも中断されたそのことで一層読者の想像力は刺戟されることになる。

しかしそれ以上に興味深いのは、ストーリーの型としてのほら話の構造である。「飛び蛙」の場合、語り手の私は、レオニダス・W・スマイリー牧師の近況を確認して欲しいというある東部の知人の紹介でサイモン・ホイラーに会う。ホイラーの話が一向に牧師の話につながらないので小説の終わり近くでは「私」は自分がかつがれたことを強く疑う。読者も同様に自分がほら話につきあわされたことを意識するようになるはずであるが、にもかかわらず小説のエンディングでは、およそ実在しそがない、しかし非常に興味深い牛について想像を巡らし、またそれが嘘であること、自分がまんまとほら話により担がれたことを楽しむのではないか。

これと同じように詩「山」のエンディングにおいて、読者は、かつがれていることを承知の上で、というよりむしろかつがれていることを楽しむように、成長する山について「どんな小ささだったのだろう？」と想像を巡らせるのではないか。ここには、想像力の単純な称揚ではなく、一度その価値を否定した上での肯定がある——というのが筆者の言いたいことである。

そこから詩「山」の基本的な読み筋が出てくるように思う。即ちこの詩は、牧歌の形式を意識した対話形式を用いていて、主たる話題はある山であり、その山に登ることの意味であるが、最も詩人が重要と考えているであろうテーマは（詩的）想像力の大切さである。但し詩全体はそのテーマをロマン主義的に——深刻に、と言ってもよいし、ストレートに、と言ってもよいが——読者に訴えるのではなく、ほら話の体裁をとって、くせ球のように、読者に働きかけてくるのである。読者は読み終わった後、ああ、ほら話にまんまと引っかかってしまったといささか自虐の念を覚えながらも、ほら話の見事さ、楽しさを振り返って堪能するのである<sup>6)</sup>。

### Ⅲ. まとめ

ペトラルカ、「ヴァントゥウ登攀記」とフロスト、「山」には興味深い類似点がいく

つかある。

例えば、いずれも登山（の試み）前に麓まで着いていて、一夜過ごして後登山にとりかかるという点。

また、いずれも一見すると簡素で素朴な外見を見せながら、実際にはかなり周到に文学的な工夫がほどこされた文学作品であるという点。例えば「ヴァントゥウ登攀記」について、ペトラルカが認めた書簡という外見のもと、古典あるいは先行作品への言及がふんだんに含まれていることは、I. 3. a. で指摘した通りである。「山」については、田舎を舞台にした、人物二人の対話という形式がウェルギリウス、『牧歌』に始まる牧歌の伝統を意識したものであり、さらに言えば、詩の形をとって、詩（的想像力）についての議論が行われる点も伝統的な牧歌のジャンルでよく見られる歌合戦を意識したものと言えるだろう。

あるいは「登攀記」「山」のいずれも、山の頂上に立つことに関心を持ち、かつ頂上からの眺めへの言及がある点。

さらに、いずれも地元の羊飼（風）の老人が登場し、また、この老人が登頂に対して否定的な態度を示す点。これに関しては、ウィリアム・ワーズワースの“Resolution and Independence”「決意と自立」（1802年初出）<sup>7)</sup> もフロストの意識の中にあつた可能性がある。

ただし、これらの類似点を指摘することによって筆者は、フロストの「山」と「ヴァントゥウ登攀記」の間に直接的な影響関係が認められると主張したいのではない。筆者が主張したいのは、いずれの文学作品においても、山および山に登るという体験が話題として用いられながら、山や山に登るという行為そのものの描写が目的ではなく、むしろ人間とはどのような存在であるかについて反省することが作品の最終的効果として意図されているということ、言いかえると、文学作品としての話の展開の仕方がよく似ているということなのである。そして、そのような反省に向かう契機として自然に視線が向けられているという点に、単なる直接的な影響関係を越えて、西洋文学に通底する自然観、風景観を認めることができるのではないかと考えるのである。

#### 注

※ 本稿の第 I 節は、2015年愛媛大学法文学部学部長裁量経費による風景研究会（「風景をめぐる人文的研究」）例会における報告（2015.11.12.）およびその年次報告書と同内容であることをお断りしておく。

1) 佐藤三夫、「ペトラルカの「ヴァントゥー山登攀」について」（『イタリア学会誌』（30），pp.93-121, iv -viii, 1981年、イタリア学会）

2) 以下、「ヴァントゥウ登攀記」への言及は、近藤恒一編訳、『ペトラルカ ルネサンス書簡集』（岩波書

- 店, 1989年) によることとし、(ペトラルカ、62) のように括弧内にページ数を記す。
- 3) 以下、Robert Frost, “The Mountain” からの引用は、Edward Lathem ed., *The Poetry of Robert Frost: The Collected Poems* (Henry Holt and Company, 1979) に拠り、括弧内に行数を記すこととする。
- 4) 例えば *Pastoral* (Routledge, 1999) においてテリー・ギフォードは牧歌を大きく3種類に分類し、およそ1610年までの牧歌とは “poems or dramas of a specific formal type in which supposed shepherds spoke to each other, usually in pentameter verse, about their work or their love, with (mostly) idealized descriptions of their countryside.” (特定の形式からなる詩あるいは劇で、その中では羊飼いともしき人物が、普通5歩格の韻文の形で、仕事あるいは愛についてお互いに話しかける。(たがいがの場合) 理想化された田園の描写を伴う。) と定義することができることとする。
- 5) Mark Twain, “Jim Smiley and His Jumping Frog” からの引用は、*The Works of Mark Twain, Volume 15, Early Tales & Sketches Volume 2 (1864-1865)* (University of California Press, 1981), p. 288. によった。引用部分の簡単な訳を以下に添えておく。「さて、そんなことスマイリーは黄いろい一つ目の牛を飼っておった。この牛には尻尾がなくって、かわりにバナナのような短い切れ端だけがついていて、そんで……」 / 「ええい糞、スマイリーと彼の哀れな牛なんかどうでもいい！」と私は愛想よくつぶやくと、老紳士に別れのことばを告げ、その場から立ち去った。」
- 6) ちなみにホーと呼ばれるこの山であるが、実在するのかどうか、またその名前に何か意味があるのかわるか、気になる人もいるかも知れない。余計なお世話ながら筆者の考えを以下に記しておく。
- 先ず前者に関して結論を先に言えば、おそらく実在はしないし、モデルがあるとしてもモデルの詮索は不要の作業と言うべきだろう。後者に関しては、この詩が一層面白くなる可能性を持つ考え方があろう。
- “Hor” という名の山が実際に存在するかどうか、インターネットで検索をすると、聖書に2つの言及と合衆国ヴァーモント州に1つの、計3つがヒットする。この内ヴァーモント州の“Mount Hor” は標高809m、氷河によって削り出された比較的大きな湖ウィロービー湖の西岸になだれ落ちる急峻な崖を特徴とする山で、ハイキング、スノークロスカントリー、水壁登山などで人気があるらしい。(http://www.summitpost.org/mount-hor/153216 2016.10.2.確認) 加えてサイト [https://en.wikipedia.org/wiki/Mount\\_Hor\\_\(Vermont\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Mount_Hor_(Vermont)) にはわざわざフロストの詩「山」の主題であるという主旨の記述も加えてある。しかし行政区域のほぼ全域を占めるというもう一つの重要な性格は持っていない。同じヴァーモント州ながら、離れた場所に Lunenburg という町は存在するものの、この町で最も高い山は町の北部に位置する Temple Mountain (695m) ([https://en.wikipedia.org/wiki/Lunenburg,\\_Vermont](https://en.wikipedia.org/wiki/Lunenburg,_Vermont) 2016.10.2.再確認) であるということで、実在の“Mount Hor” と Lunenburg とは関係はなさそうである。読者各自が想像力を働かせその姿を頭の中に思い描くことを促すこの詩の主旨を考えた時、この詩の中の“Mount Hor” はフィクションの山であるとしておくのが最もふさわしいであろう。
- “Hor” という名前についてであるが、<http://www.abarim-publications.com/Meaning/Hor.html#.V94D0Cjp2iE> に、聖書で言及される2箇所でのホー山の語源として、“The name Hor is the same as the noun הַר (*har*), meaning mountain. In fact, the phrase “Mount Hor” employs twice the same word: הַר הָהָר (*har hahar*) :” と説明してあることが興味深い。詩「山」の中で地元民が「ホー」と呼んでいる山は、その語源をたどれば「山」という意味だというのは、詩人フロストの意図的な「遊び」であった可能性がある。
- 7) William Wordsworth, “Resolution and Independence” 「決意と自立」(1802年初出) の概要は「人生に対する漠然とした不安、怖れを感じながらも、自然との共感に充足している語り手の「私」が一人の老人に出会い、彼との対話を通して新たな自覚と決意を得るに到る。」というものである。